音楽・芸能から学ぶ中東イスラーム世界

甲南大学 教授

中町（なかまち） 信孝（のぶたか）

はじめに

最近では日本のニュースでも，中東地域，あるいはイスラーム世界に関連する報道は数を増している。しかし，個々の事件がいくらクローズアップされても，中東地域全体のイメージは決して親しみやすいものにはなっていない。むしろ，日頃報じられるテロや内戦，政変のニュースから，生徒たちは中東やイスラームと聞くと恐怖や不快感を感じてしまうことが多いだろう。現場の先生方はこうした地域の情報を教えるのにさぞかし苦労されているのではないだろうか。

本稿では，この地域の文化的で日常的な側面を紹介する。手がかりとなるのは，現地の人々が日常的に親しんでいる歌謡曲，ポップスなどの芸能情報である。「何を悠長な，国際社会が直面する喫緊の課題を差し置いて芸能情報なんて！」と思われる向きもあるかも知れない。しかし，私たちも初対面の相手と会話をするときに，いきなり政治や宗教の話題から話すことはしないのではないだろうか。むしろ最初は音楽や映画，スポーツなど趣味の領域から共通の話題を見いだそうとする。中東イスラーム世界を国際社会における「隣人」と見なすならば，まずは文化的な話からとっかかりを探すのも，大事な交流手段のはずである。

１．中東イスラーム世界と音楽

中東地域に住む人々の多くが信仰するイスラーム教については，とにかく厳格というイメージをもつ人が多いかもしれない。たとえばイスラーム教の信者には，酒を飲んだり豚肉を食べたりすることが禁じられている，女性はベールを被らなければ外出が許されない，そして音楽については人前で歌うことが禁じられ音楽家たちは弾圧を受ける，等々。

しかし，こと音楽に関しては，このイメージは完全に間違っている。たしかに，かつてアフガニスタンのターリバーン政権や，マリを支配したアルカーイダ系組織が，支配下の人々から楽器を没収して破壊させたり，歌手を処罰・追放したりする政策を実施したことがあった。しかしそのような事件は例外中の例外であり，多く

の中東諸国では音楽活動を弾圧するようなことは起こっていない。

むしろ，歴史を振り返れば中東地域は古くから音楽の先進地域であった。たとえば日本や中国にある楽器の琵琶は，ヨーロッパの古楽器リュートと同様に，そのルーツは中東地域にある。アラブ音楽で今も用いられるウードという弦楽器が，琵琶やリュートの形に非常によく似ていることは，そのような楽器の伝播の様子を物語っている。また古代ギリシアでプラトンらが確立した音楽学の伝統は，中世イスラーム世界ではアッバース朝の首都バグダードに継承されて発展し，それがイスラーム政権下にあったスペイン・イベリア半島を経由して中世のヨーロッパに多大な影響を与えたとされる。世界中の音楽にとって中東地域が果たした役割の大きさがうかがえるだろう。

イスラーム教という宗教もまた，音楽とは切っても切れない縁がある。イスラーム教徒の多い地域を訪れた人なら，一定の時刻になると町中で「アザーン」という，礼拝時刻を告げる合図の声が聞こえることをご存じだろう。「アッラーフ・アクバル(神は偉大なり)」で始まるフレーズが町のあちこちからわき起こるのだが，無伴奏の民謡，あるいは詩吟のような趣がある(https://youtu.be/fzMJYKrfoMQ)。このほかにも，イスラームの聖典『コーラン』を読み上げる際の節回しが歌のように聞こえたり，神や預言者を讃えるための賛美歌が歌われたりと，イスラームの宗教儀礼には音楽的なものが満ちあふれているのである。

そして今，中東各国はそれぞれ独自の音楽文化を発展させている。メローな旋律で恋人への思いを歌うラブソングもあれば，若者が日々胸にいだいている考えを打ち明けるような曲もある。いかにもポップスというものから，ロック，テクノ，ラップと，ジャンルも様々である。衛星放送チャンネルが地域の隅々にまで行き渡り，インターネットの普及も進んでいる今，グローバル化の影響は中東地域にも浸透している。世界中で同時に進んでいるポピュラーカルチャーの流行の波に，中東地域だけ影響を受けずにいるなどと言うことは，とうにあり得ない時代になっているのである。

2．アラブ芸能は一つ

2013 年に世界中で大ヒットしたアニメ映画『アナと雪の女王』(日本での公開は 2014 年)。アメリカで制作されたこの映画は，その後日本はもちろん世界各国の言語で翻訳版が作られ，それぞれの国で流行した。その中には，中東イスラーム世界で上映されたアラビア語翻訳バージョンもあり，現地で相当の人気を博した。雪と氷の世界にあこがれる子どもたちの気持ちは，日本でも中東でも変わらないということだろう。

試しにインターネットの動画投稿サイトの YouTube で，「Let it go Arabic」と打

ちこんで検索してみると，テーマ曲「レット・イット・ゴー ～ありのままで～」のアラビア語版動画がいくつも見つかる(https://youtu.be/vXEmuTusVf8)。ただし，アラビア語でのタイトルは「あなたの秘密を解き放て」という意味に意訳されており，出だしの部分の歌詞も日本語版とは若干異なっている。

今夜の雪は足跡の付いていない砂漠のよう
途方に暮れた王国を私が平和に統治する

雪原の風景を「砂漠」にたとえるのは，中東の気候風土を表しているとも言える。

一聴すれば，アラビア語独特の，喉の奥から発せられる子音の発音が不思議な雰囲気を醸し出す，ちょっと大人っぽいエルサの歌声が堪能できる。これを歌っているのは，エジプト出身のネスマ・マフグーブ。人気沸騰中の実力派若手歌手だが，『アナ雪』に抜擢される前からすでにエジプトのみならず，アラブ諸国全域で人気を誇っていた。彼女が一躍スターダムにのし上がるきっかけは，2011 年に『スター・アカデミー』というオーディション番組で優勝したことだった。

『スター・アカデミー』とは，そもそもオランダで制作されたテレビ番組であり，その後スペイン語圏，英語圏，フランス語圏でも系列番組が作られて世界中でヒットした。歌手志望の若者たちが番組中にパフォーマンスを行い，観客の人気投票によって優劣を決めるという，視聴者参加型のいわゆる「リアリティ番組」である。ネスマが出演したのは，レバノンのテレビ局 LBC が制作するアラビア語圏向けの『スター・アカデミー』第 8 シーズンであった。このアラビア語版に出場するのはネスマのようなエジプト人のほか，東はイラクやアラビア半島の国々から西は大西洋岸のモロッコまでと実に幅広く，これら各国に向けて衛星チャンネルを通して隅々まで放映されているのである。ただし，中東地域の中でも，トルコやイランはそれぞれトルコ語，ペルシャ語が公用語であるため，アラビア語版の番組とは縁がない。

こうしたアラビア語芸能を共有する国々のことを「アラブ諸国」といい，そこに住む，アラビア語を共通の言語とする人々を「アラブ民族」という。歴史的に観るならば，アラブ諸国はオスマン帝国の支配から西洋列強による植民地支配を経て，現在までに 20 数か国に分かれて独立した「分断国家」である。戦後，エジプトのナセル大統領の時代には「汎アラブ主義」が唱えられ，アラブ国家の合同を目ざす政治的な取り組みも行われたが，実際にそうした国家合同が長続きすることはなく，ゆるやかなつながりを志向する「アラブ連盟」も決して一枚岩ではない。「アラブは一つ」というスローガンは今や現実的には意味をもたなくなって久しい。しかし，音楽や芸能の世界では一貫して「アラブは一つ」であり，エルサの声を担当したネスマを生み出した『スター・アカデミー』のような番組はそのことを象徴していると言ってもよいだろう。まさしく，アラブの芸能界は一つ，なのである。

３．一つのアラブとパレスチナ

『スター・アカデミー』人気に対抗して始まったもう一つのリアリティ番組が，『アラブ・アイドル』である。こちらは元々イギリスで始まった番組であり，世界中に系列番組があるが，アラブ版はアラブ首長国連邦のドバイに拠点を置く放送局 MBC が放映している。この『アラブ・アイドル』が 2013 年に放映した第 2 シーズンで，ちょっとした事件が起こった。イスラエルの占領下にあるパレスチナのガザ地区出身の男性歌手が，視聴者からの圧倒的な支持を集めて優勝したのである。彼の名前はムハンマド・アッサーフ。甘いマスクには似合わぬ渋い歌声と，なによりも難民キャンプで育ったという劇的な境遇が，アラブ諸国の人々に好印象を与えた結果だろう。

ポップス路線の『スター・アカデミー』とは異なり，『アラブ・アイドル』は伝統歌謡的な歌唱力を重視する傾向がある。『アラブ・アイドル』出場者たちは往年の名歌手たちのスタンダードナンバーをカバーすることが多く，その中でもアッサーフは，出身地であるパレスチナの民謡を歌うことで好評を博した。1948 年のイスラエル建国以来，住む場所を奪われ苦しい生活を強いられているパレスチナ人たちであるが，彼らの間で流行している音楽がこれほどまでにメディアに登場することは珍しかったのであろう。アッサーフの登場は，パレスチナ人を勇気づけたのみならず，アラブ諸国の人々にパレスチナ人への共感と平和への願いを再びわき上がらせることになったのである。

たとえば，彼が番組中に歌った「おお，飛ぶ鳥よ」という曲がある(https://youtu.be/O-a3zagLXIY)。国境を越えて遠い故郷へと飛んでいく渡り鳥に望郷の思いを託したこの歌は，ふるさとを奪われて多くの人々が難民生活を余儀なくされているパレスチナ人の心情を代弁したものと言える。その歌詞は以下のような内容である。

おお，飛ぶ鳥よ　家路につく者よ　　私はお前を見つめ　神がお前を見守る
旅人よ　羨望を引き起こす者よ　　パレスチナは我が故郷　甘美なる神の恵み

この後の歌詞には，ハイファ，ナザレ，ガザ，そしてエルサレムと有名なパレスチナの地名が次々と登場し，世界中に離散して故郷に帰ることのかなわないパレスチナ人たちの郷愁に訴えかける。また，アラブ諸国に住むそれ以外の人たちも，亡命パレスチナ人たちの境遇に思いをいたし，大いに同情を寄せたのであった。

このムハンマド・アッサーフは，番組での優勝後歌手デビューを果たしたのち，今では国連のパレスチナ難民救済事業機関の青年大使を務めるなど，国際的にも注

目されるセレブリティーとなっている。彼の半生を題材としたパレスチナ人映画監督ハニ・アブ・アサドによる伝記映画『歌声にのった少年』は日本でも公開されており，子どもから大人まで楽しめる作品である。

4．音楽から政治を見る

ポップスから伝統歌謡，民謡まで，様々な歌が流行する中東イスラーム世界だが，さらに近年はロックやラップなどの音楽も好まれるようになった。それらの中にはアッサーフの歌ったパレスチナ民謡のように，政治的なメッセージとも受け取れる楽曲もある。政治的メッセージソングが聴衆に訴えかけ，政権交代の大きな原動力となったのが，2011年前後に多くのアラブ諸国で起こった，「アラブの春」と呼ばれる民主化運動であった。なかでも，いち早く「ジャスミン革命」を起こしベン・アリ大統領を辞任に追い込んだチュニジアや，同じく革命によってムバーラク大統領体制を崩壊させたエジプトでは，革命の始まる直前に反体制ラップが流行していたということは注目に値しよう。特にエジプトでは革命運動の最中にインディーズのロック歌手がYouTube上で，革命を鼓舞する楽曲を公開して多くの聴衆を獲得していた。その代表例が，ロックバンド，カイロキーらによる「自由の声」という曲である(https://youtu.be/SJgjIsfPKmE)。こうした革命前後の音楽活動については，拙著『「アラブの春」と音楽』(DUブックス，2016年)にて詳しく説明したのでご参照いただければ幸いである。

「アラブの春」で変革を志向したアラブ諸国であるが，その後の新しい国づくりはいずこも難航している。チュニジアのように選挙によって民主的に政権が選び取られた国はまれであり，革命後の反動で独裁体制に逆戻りしたエジプトのような国もあれば，苛烈な弾圧から内戦状態に陥ったシリアのような国もある。しかし，音楽を通じて自らの主張を公にすることが，現在も中東の人たちの心の支えとなっている。チュニジアやエジプトでは革命中に人気の出たラッパーやロックバンドが今も人々の支持を集めているし，シリアから国外に逃れた人々の中には移住先で音楽活動を続け望郷のメッセージを発するミュージシャンもいる。

また，音楽を使った抗議活動は中東のみならず，その後世界中に広まった市民運動のお手本ともなっている。2011年にアメリカで盛り上がった「ウォール街占拠運動」や，2015年の日本における「シールズ」の安保法制反対運動は，音楽を効果的に用いたデモであったが，これらの運動に「アラブの春」が与えた影響は非常に大きい。衛星放送やインターネットを介したグローバル化の波にさらされた中東地域が，今度は世界中に影響を及ぼすような変革を生み出したということになる。音楽を介して眺めてみると，中東イスラーム世界をより身近なものに感じられるのではないだろうか。